

## 『クラテュロス』再論

田中利光

## I

プラトンの作品『クラテュロス』篇のはじめのところで、次のような三つのことがいわれている。

1. だれかがなにかを指して呼ぶ名前は [どんなものも], それは当の正しい名前なのだ (an tis tōi thētai onoma, touto einai to orthon) (384d2-3) [プロタゴラス説を示唆するような考え—引用者]
2. 「正しい」というのは、「合意と取り決め」(synthekē kai homologia) (384d1-2)でそうであるのにほかならない [1 とかみあっていないと思う。そして次の3に通じていくのだと思う—引用者]
3. それぞれのものごとの名前が自然本来的にできあがっているというのでは決していない, どんなものごとのどんな名前もだ。そうではなくて呼び習わしている人々のしきたり慣習によってできているものだ (ou gar physei hekastōi pephykenai onoma ouden ouden, alla nomōi kai ethei tōn ethisantōn te kai kalountōn) (384d5-7)

このような考えを検討しながら提示されているこの作品としての説の内容は次のような四つにまとめることができるのではないかと思う。

1. 名前で呼ぼうとする場合, 当のものごとの自然本来のあり方に即した仕方, また即した名前を使用すべきである (387d4-6)
2. その場合使用される, 慣習的に与えられている名前は, ものごとのあり方を区別する道具としてしかるべき立派さを備えている (388b13-389a3)
3. その立派さとは, 慣習的に与えられている名前がそれぞれの名前に対応する模範としての名前の模造品であるということである (389d4-8)
4. その模造品としての立派さの具合を判定・監督をするのは問答家である (390b1-d7)<sup>(1)</sup>

(1) 以上 I に述べた点については, 拙論『『クラテュロス』の一解釈』(西洋古典学研究 XL [1992]。Pp.1-8) でより詳しく取り扱った。

## II

上述の四つの内容のうちで, またこの作品全体の中で, その3の内容が一番肝心な内容ではないかと思う。その4の内容のあとでもう一度同じ趣旨のことが繰り返して述べられている。

---

キーワード: プラトン, 『クラテュロス』, 名前

それではいいかね、このうえもなく優れた人よ、かの慣習制定者 (nomothētēs) [慣習が擬人化され、ミュートスとして語られている—引用者] はほかでもなく、かのまさに名前であるところのもの (auto ekeino ho estin onoma) [cf. 『パイドン』 75d2. episphegizometha touto, to “ho esti”, 『まさに何々であるところのもの』という刻印を押す。—引用者] を見ながら (bleponta), すべての名前を制作且つ制定し、そしてそれぞれのものごとにとって自然本来的である名前 (hekastōi physei pephykos onoma) [意味] を音のつながりの中に置くこともできなければならないのではないか [389d4-8. 以下『クラテュロス』 I と略称]

ものごとについている名前は自然本来的なものである、そして万人が名前の制作者なのではなく、それぞれのものごとにとって自然本来的にまさしく名前であるもの (to tēi physei onoma on hekastōi) を見つめながら (apobleponta), それについて見たところ (autou to eidos) を文字のつながりの中に置くことのできる、かの者だけがそうなのだ [390e1-5. 以下『クラテュロス』 II と略称]

### III

『クラテュロス』 I の「ほかでもなく、かのまさに名前であるところのもの」(auto ekeino ho estin onoma) と『クラテュロス』 II の「それぞれのものごとにとって自然本来的にまさしく名前であるもの」(to tēi physei onoma on hekastōi) とは、いい回しは異なるが文脈から考えて同じものを意味しているとすることができるだろう。そして『クラテュロス』 I の auto ekeino ho estin onoma, 『クラテュロス』 II の to … onoma on という単数形は Collective Singular と解する (cf. H. W. Smyth, *Greek Grammar*, 996)。そしてこの二つの表現は種々もろもろの名前のアイデアの集合体を意味していると解する。そしてもろもろの名前のアイデアとはもろもろのアイデアの名前のことだと解する。一方それに対して『クラテュロス』 I の hekastōi physei pephykos onoma, 『クラテュロス』 II の autou to eidos は慣習的にわれわれに与えられている、もろもろの名前の意味のことであると解する。

さて、このように理解してもよいとするならば、もろもろの名前のアイデアの集合体は、慣習的にわれわれに与えられている、もろもろの名前の「パラダイグマ」と呼んでも正しく呼ぶことになるのではないかと思う。一方、慣習的にわれわれに与えられている、もろもろの名前の方は、この「パラダイグマ」の「エイコーン」であるとか「ホモイオーマ」であると呼んでも正しく呼ぶことになるのではないかと思う (ちなみに、『クラテュロス』 I, 『クラテュロス』 II の表現全体から推して、慣習的に与えられている名前は「パラダイグマ」を例えば「分有している」等のように呼ぶことは適切でないように思う)。

ここでその内容をくどいようだがあらためてまとめると、もろもろの名前のアイデア (アイデアの名前) は、われわれに慣習的に与えられているもろもろの名前 [の意味] のパラダイグマである、われわれに慣習的に与えられているもろもろの名前[の意味]はもろもろの名前のアイデアをパラダイグマとしているエイコーン、ホモイオーマである、ということができよう (以下この内容を A と略称)。

#### IV

以下、Aの含蓄を理解するために手がかりになると思われるいくつかの言説とAを照らし合わせてみることにする。

まずはじめに藤澤令夫著作集〔以下『著作集』と略称〕II 62-63頁「形而上学の存在理由」(1974)

わたしの誤解でなければ、Aの内容を具体的に、そしてたいへん的確に教えてくれるものとして挙げることができよう。すこし長くなるが、以下に引用する。

家具の専門家も三才の童子もそれぞれ、与えられた任意の知覚的性状が「机」であるかないかを判別できるだろう。したがって、この判別それ自体が「机」という言葉の意味を知ることの意味を十分に尽くしているとすれば、両者はいずれもまったく同等の資格で、「机」という言葉の意味を「知って」いることになる。しかし実際には、それぞれの知り方には明らかに差異があり、ひいては判別それ自体の中身も違っている。判別にはいかに希薄にせよ、判別対象への対応的行動の準備が含意されているが、その対応的行動は、家具の専門家と童子とはそれぞれ違うだろう。知り方や中身がどうであれ、知ることは知ることであり、判別は判別だと言われても、この差異は——「机」の代わりに「正義」「悪」「戦争」「酒」「女」(あるいは「男」)「人間」などを考えてみても——われわれの経験のなかでずっしりと重みをもっていて、とうていこれを無視することはできない。そしてこの「知り方」の差異こそは、「机」とは何であるかあるいは「机とはいかなる機能を果たすべきものであるか」を知っているその知り方の差異であり、家具の専門家は三才の童子よりも、この「机」とは何であるか、いかなる機能を果たすべきものか」ということをよく(詳しく)知っているのである。

だからまた、彼がこの知識に照らして「机」として判別するもの——したがって実際に「机」であるもの——を、三才の童子は、その形状その他のいかによっては、「机」としては判別しないということもありうるであろう。同様に、「人間」という言葉の意味の知り方にはさまざまな差異や段階があり、われわれは経験を通じて「人間である」ことへの認識を深め、それに「眼が開かれていく。そしてそれに応じて、「人間」を「人間」として判別するその判別自体のあり方も変わっていく。

このように「人間とは何であるか」に「眼が開かれていくにつれて判別自体のあり方も変わっていくとすれば、この「人間とはなんであるか」ということは、「人間である」という判別自体の中に働いてそのあり方を規制している規範的な何ものかであると考えざるをえないであろう。

更に引用を続けたいのだが、ここでやめることにしたい。「判別自体の中に働いてそのあり方を規定している規範的な何ものか」で言われているものはアイデアのことで名前アイデア(アイデアの名前)のことではないが、そう読み替えても誤りではないと思う。「机」なり「人間」という、慣習的にわれわれが知っている意味は、それぞれの規範、すなわち名前アイデアの模造品「アイコン」であるという事態(とそれに関連する事態)を、たいへん適切に説明してくれていると考える。

## V

次に『パイドン』102b1~3。

例のアイデアというものが、各々ひとつずつ存在しているということ、そしてその他のものごとは、そのアイデアを分取していることによって、当のアイデアの名前を保有しているのであるということ (einai ti hekaston tōn eidōn kai toutōn talla metalambanonta autōn toutōn tēn epōnymian iskhein) (以下『パイドン』Iと略称)

アイデアの個別的事象が「当のアイデアの名前を保有している」(autōn toutōn tēn epōnymian iskhein)とはどのような意味であろうか。Aの内容とくいちがっているようにも思われる。Aを含意しているにはあいまいな表現であるが、含意していると取れないこともない表現であるようにも思われる。藤澤先生は踏み込んで、「形相と同じ名前をつけて呼ばれるようになる」と訳しておられる。「同じ名前」を「同じ意味の名前」のことだとすれば、Aとくいちがうことになるが、実物と模造が「同じ名前」をつけて呼ばれるという場合もあるわけで、そうなるかならずしもAとくいちがうともいえない。

ちなみに『パイドン』100c4-6には次のように言われている。

絶対的に美しいものは別として、何かほかの或るものがもし美しい場合には、それはかの「絶対的に」美しいものを分有しているためであって、決してほかのなにものによって美しいのでもない (以下『パイドン』IIと略称)

そしてすこしおいて、『パイドン』Iが述べられているわけである。そこで『パイドン』IがAの内容とくいちがっているとすれば、次のような不都合な点があることになる。たとえば〈美〉のアイデアは美しい、という命題(1)と、この特定の事物は美しい、という命題(2)を比較した場合、『パイドン』IIによれば、命題(1)の「美しい」という名前は絶対的に「美しい」の意味なのに対して、個々の美しい事物の「美しい」は、〈美〉のアイデアの名前をもらい受けて、間接的・第二次的に「美しい」の意味であるはずだ(『著作集』II, 116頁「プラトンのアイデア論の用語について」[以下『用語』と略称](1974)参照)。にもかかわらず、『パイドン』IをAの内容と矛盾するように理解すれば、資格・身分が同じでないにもかかわらず、無造作に、アイデアの名前の意味とその事例の名前の意味は同じだと取ることになるわけである。プラトンは『パイドン』Iを、『パイドン』IIと同士打ちしないように理解することを求めているのだと考えられる。しかしこういう問題があると思う。われわれに直接与えられているのは個別的事例の名前だけだ。agathonという名前を発音すれば、〈善〉のアイデアの意味内容がわかるわけではない(『国家』505b5-c4参照)。そして日常的な意味以上のものに目が開かれていくというのは、特別な経験が必要とされるのではないか。そういうことを考えていくと、アイデアの名前と個別的事象の名前を類同化しがちなのではないか。そういう点を考えていくと、『パイドン』Iの表現は厳密さに欠ける(akribēias ellipes. 『国家』504b5-6参照)とプラトンは考えていたのではないか。

『パイドン』Iの文脈はAのような内容を展開するのに作品構成上ふさわしいとも思われない。また「辞句が気やすく使われていて、その細かい点まではやかましく詮議だてのしていないということは、多くの場合その人の生まれの悪くないことを示すもの」(『テアイトス』184c1-2。岩波版『プラトン全集』[以下『全集』と略称]訳)ということがいわれている。やかましく詮議だてしていないということなのでもあろう。「しかし時にはそれの必要なこともある」箇所として『パイドン』Iをプラトンは考えていたのではないかと思われる。

## VI

次に『国家』596a6-7。

同じ名前でわれわれが呼んでいる多くのものごとを各々一つずつにまとめて、それぞれのまとまりについて、それぞれ一つずつ個別にアイデアというものをわれわれは確か立てることにしていると思うのだが (eidōs gar pou ti hen hekaston eiōthamen tithesthai peri hekasta ta polla, hois tauton onoma epipheromen) [以下『ポリテア』Iと略称]

多くのものごとを「同じ名前」(tauton onoma) で呼ぶということが言われている。多くのものごとの例として多くの机を取り上げれば、「机」が「同じ名前」ということになる。そしてそれに対して一つのアイデア〈机〉が立てられることになる。ところで「机」という名前と〈机〉というアイデアの名前は同じだろうか。それともAの内容が含意されているのだろうか。ここではなにも言われていない。『ポリテア』Iに引き続いて、それ以上はなんのこともわりもなく無造作に〈机〉と〈寝椅子〉のアイデアを例にして話が進められていく。もし「同じ」であるとすればどうであろうか。するとこの「やりつけの手順」(eiōthyia methodos) に従って、〈机〉のアイデアもその個別的な事例である多くの机の仲間に加わり、「同じ名前」で呼ばれることになる。とすると、「同じ名前」で呼んでいる多くのものごとに対してあらためて別の〈机〉のアイデアを立てることになり、同様にして次々と〈机〉のアイデアを立てるという奇妙なことになる。もし最初に立てた〈机〉のアイデアの名前がその個別的な事例である多くの机の名前「机」と身分・資格において同じだと考えなければ、こういう奇妙なことにはならないであろう。

ちなみに『ポリテア』Iのすこし先のところ(597c1~9)で、神は〈まさに寝椅子であるところのもの〉というアイデアは一つだけ作って、二つとは作らない、二つだけであれ作ったとすれば、ふたたび一つのものが新たにあらわれることになる。先の二つのは、新たにあらわれたものの姿(eidōs)を持つことになり、新しいものの方がかの〈まさに寝椅子であるところのもの〉であり、先の二つはそうでないことになる、神は真に在るところの寝椅子の真の作り手であることを望み、まさしく本質的に一つの寝椅子を作ったのだ、という意味のことが言われている。『ポリテア』Iを無限背進を引き起こさないように、理解することを求めているといえよう。しかし『ポリテア』Iの表現そのものは『パイドン』Iと同様に「細かい点まではやかましく詮議だてのしてない」ものということになるのではないか。

ちなみに『パルメニデス』132a~b2で言われていること、——大きいものが何かいろいろあると思われる場合に、それらすべての上に、ひとつのアイデア〈大きいもの〉があると考え、次にその〈大きいもの〉とその他の大きいものを見ると、もう一つ別のアイデア〈大〉が現れることになる——このようなアポリアは、『ポリテア』Iのような言説の不明瞭から起こりうる奇妙さをプラトンみずから指摘してみせ、注意を喚起したものとわたしは考える。

- (2) 「思うにきみが、それぞれに単一の形相の存在を考えるのは、次のようなことからあろう。すなわち大きなものが何かいろいろ多数あるときみに思われる場合、そのすべてを向うに見て、そこに何か一つの同じ〔大という〕容相が認められると、たぶんきみは思うわけなのだろう。そこから、〈大〉というものが一つのものとしてあるときみは考えることになる」(『パルメニデス』132a1-4『全集』訳)の内容と表現は『ポリテア』Iに類似していると思う。藤沢先生は『ポリテア』Iを「アイデア論の思想を最も一般的・定式的な表現で述べた重要な文章である(V. 476A, 479A~B, E, 480A, VI.

493Eなどを参照)」としておられる(『全集』693頁)。しかし、例えば、V. 476Aなどが一つのものから多くのものへという順序で緊張をもって語られるのとは、逆の順序で、しかも「やりつけの手順」として型にはまった感じのものになっている点も注意されてよいのではないか。

ここで藤澤先生が『パルメニデス』(132A1-B2)において提出されたいわゆる「第三の人間」の議論の基本構造(『用語』121頁)について説明しておられる点にもふれておこう。「アイデアとしての〈大〉そのものが、個々の事物が「大である」(命題ii)のと同じ意味において「大である」のだとするならば[この仮定を a と呼ぶことにする。なお(命題ii)とは「〈美〉のアイデアは美しい」という命題とはまったく違った事態を語っている「この特定の事物は美しい」という命題のこと—引用者]、そして、或るものが大である場合、そのものは、それが分有している〈大〉そのものと同一でありえないとすれば[この仮定を b と呼ぶことにする—引用者]、『パルメニデス』のこの個所で述べられている無限背進(はじめの〈大〉そのものと別の〈大〉のアイデアが次々と立てられること)は、当然避けられないことになる」というように説明しておられる。

しかし『パルメニデス』のテキストはbのような仮定をすることを許すような具合になっていないと思う。わたしは上で『パルメニデス』132a1-4の内容と表現は『ポリテイア』Iに類似していると述べた。また『ポリテイア』Iの表現にはaのような仮定をすることができるようなあいまいさがあると指摘した。『パルメニデス』(132a1-b2)は『ポリテイア』Iのこの種のあいまいさがあることに対する注意を喚起しているのではないか。

ところで、『国家』第五巻の冒頭で(449b1-c4)、登場人物アデイマントスの抗議——つまりあんなことをぞんざい(phaulōs)に言って、議論のなかからけっして些細なものでない事柄全体をこっそり省いている、という抗議をうけて、第五、六、七巻の内容が展開されていることは周知のことであろう。おおげさになるが、これを真似して言えば、『パイドン』I、『ポリテイア』Iの言説の中の名前に関するところについても、同じように、あんなことをぞんざいに言って、議論のなかからけっして些細なものでない(ou to elakhiston)事柄全体をこっそり省いている、といえるのではないか。『クラテュロス』篇でソクラテスは「昔から言うではないか、立派なことは難しい、その真相を学ぶのはね。しかも特に名前に関して学ぶべきことはけっして些細なことではない(ou smikron)」と言いながら登場してくるように描かれている。『クラテュロス』I、『クラテュロス』IIの内容は『パイドン』I、『ポリテイア』Iの中で「その細かい点まではやかましく詮議だてのしていない」ところを詮議だてしたものなのではないか。『パルメニデス』(132a1-b2)によって注意を喚起されている(とわたしは考える)『ポリテイア』Iのあいまいさを払拭するものとして言われているものではないか。

ところでAの内容は『クラテュロス』以後の後期著作において反映されているだろうか。そのような箇所として『第七書簡』342を挙げることができると思う。そこでは「おおよそ在るもののおのおのについては、その知識を手に入れるばあい依拠しなければならぬものが三つ」(342a7-8『全集』訳)あるとされ、第一には onoma, 第二には logos, 第三には eidōlon, そして当の epistēmē は第四のもの、そして「知られる側の、真に実在であるもの」(auto … ho de gnōston te kai alēthōs estin on) は第五のもの番号付けられている。そして第四の epistēmē は実は更に[より狭い意味でのということだと思ふ] epistēmē, nous [知性知?], alēthēs doxa の三つが一括されたものであることが述べられている。そしてこの三つのうち「第五のものに最も接近してい



るのは」 nous であるとされ、「それ以外のものは、もっと隔たっている」(342d1-3)と言われている。それはさておき、プラトンは第一から第四の「四者を何とかして把握しないかぎり、何びとも、けっして第五のものを直接に把握する知に、完全にはあずかりえない」(342d8-e2)ということを行っている。「第五のものを直接に把握する知」と訳されている部分のテキストは単に epistēmē [の属格形] tou pemptou である。この第五のものの epistēmē は文脈からいって、第4の epistēmē ではありえない。『全集』の訳者は「これは、真実の実在そのものを、直接に知悉する知。この「知」は、全体としては、人間の意識を超え、精神を超えてあるもの」と説明しておられる。「知悉する」とされる一方で、「人間の意識を超え、精神を超えてあるもの」というのはどういうことかよくわからない。第五のものが先に、gnōston にして、alēthōs on と二重に言われていた。epistēmē tou pemptou とは、第五のものの gnōston の面を言ったものではないか。そして『クラテュロス』Iの auto ekeino ho estin onoma のように言われているものをこれに引き当てることができはしないかとわたしは憶測している。すくなくとも『パイドン』I (toutōn talla metalambanonta autōn toutōn tēn epōnymian iskhein) [ほかの事物はアイデアを分有していることによつて当のアイデアの名前を保有している]などの表現とはすっかり様変わりした表現がなされていることは確かだと思う。

『ティマイオス』52aにおいて存在するものが三分類されている。すなわち(1)恒常不変のアイデア、(2) to homōnymon homoion te ekeinōi, (3) khōra 「場」。あいかわらず homōnymon 「[かのものと] 同じ名前をつけて呼ばれる」という表現が行われているのではないかと、言われるかもしれない。しかし『パイドン』78e2の tōn ekeinois homōnymōn 「かのものと 同じ名前をつけて呼ばれる」という、いわば無防備な表現とは異なり、homoion te (そして似ている)が付け加えられている。同じ名前であっても、同じ意味ではないことがはっきり断られていることになると思う。Aの内容が反映しているとみるのはうがちすぎだろうか。hom-, hom- という同じ音を立て続けに使う修辞法 Parechysis が用いられているところにも、特別な意図が感じられるのではないか。ちなみに『アリストテレス著作集』は homōnymon (テキストは複数形 homōnyma) の定義で始まっている。アリストテレスの流儀で homōnymon の意味に変更が加えられている。プラトンの場合も、必要な変更が加えられてすでに術語化して使われていたことも考えられる。いうまでもなくアイデアとその個別的事象は原形とその模造品という関係で「同じ名前をつけて呼ばれる」ということを意味する術語となっていたと理解するわけである。いずれにせよ『パイドン』78e2の tōn ekeinois homōnymōn 「かのものと 同じ名前をつけて呼ばれる」という「やかましく詮議だてのしていない」表現が『ティマイオス』52a4-5ではさりげなく巧みに詮議されたものになっているということになるのではないだろうか。

## VII

次に『著作集』IIの論考『用語』における『クラテュロス』のとりあつかいについてみることにする。『用語』の内容のひとつは、「アイデアとその事例(個別的事象)との関係を表現するプラトンの言葉に着目し、そこに何らかの発展・変遷が見られるかどうか」(107頁)の調査である。そして、問題の関係を記述したプラトンの用語を、三つのグループに分類して調査している。(I)「もつ」(ekhein)など。但し、アイデアと内在的性格とが分けられ、後者についてのみ用いられている場合は(I')。(II)「分有する」(metekhein)など。(III)「原範型—似像」(paradeigma-

eikōn の関係として記述する諸表現。

そしてその調査の結果として、「『饗宴』『パイドン』に先立つ前期の諸対話篇においては、ソクラテスが問いかける「Xとは(例えば、〈勇氣〉とは、〈敬虔〉とは、〈徳〉とは)何であるか」という問におけるXと、その事例となる個々の行為・事柄との間の関係は、ほぼ例外なく、(I)のグループの用語によって表現されている」と観察されている。例えば「それらの徳〔個別的事象〕はすべて、ある一つの同じ相(本質的特性)[X]をもっている(ekhousin)」（『メノン』72c7『全集』訳)のように。また(I')の例は、例えば、『パイドン』102b2-3でアイデアが在り、その他の事象はアイデアを分有していることによって、当のアイデアの名前を保有しているということが言われたあとで、人が「小」〔内在的性格〕を持っている(ekhei)とか、「大」〔内在的性格〕を持っている(ekhei)ということが話題になっているが、そのように用いられている場合。

また「(II)のグループの「分有」用語がこの関連で登場してくるのは、こうして、はっきりと『饗宴』『パイドン』以後においてであり、そしてその登場は、(III)のグループの「似像」用語による表現方式の明確な登場と時を同じくしている」と観察されている。

ここで『クラテュロス』についての先生の観察を見てみよう。『クラテュロス』は前期の諸対話篇の末尾に置かれ、その部分は次のように表示されている(『用語』128頁)

アイデア論用語調査票

	(I) (I')	(II)	(III)
	(中 略)		
『クラテュロス』	389B9-C1, E3-390A1 390B1-2		(389A-B)

389A-B が括弧付きで(III)の例として挙げられている。389a6-b3には次のように言われている。「何を見ながら大工は〔機織りの〕杼を作るのか。杼の機能をちゃんと果たしていた、なにかそのようなものを見ながらではないか(ar'ou pros toiouton ti ho epephykei kerkizein;)」「杼を作っていてこわれ、また別のを作ろうという場合、こわれたのを見ながら作ろうとするだろうか、それともこわれたのを作っていた時にも見ていたあの手本を見ながらだろうか(pros ekeino to eidos pros hoper kai hēn kateaxen epoiei;)」。著書『アイデアと世界』に収められた『用語』では、括弧付きの理由を次のように説明しておられる。「『ゴルギアス』503E~504Dと『クラテュロス』389A~Bを(III)グループの欄に括弧付きで一応挙げたのは、「製作者がモデルに目を向けて作品を作る」ということが述べられているからであるが、「モデル」や「似像」を表す語そのものが用いられているわけではない。『著作集』に収められた『用語』のこれに当る部分は次のようになっている。「『クラテュロス』389A~Bを(III)グループの欄に括弧付きで挙げたのは、「製作者がアイデア的なモデルに目を向けて作品を作る」ということが述べられているからであるが、作られた作品がモデルの「似像」として語られているわけではない。

『ゴルギアス』503E~504Dが削除されているのは適切だと思う(理由は省略)。『クラテュロス』389A~Bについて「作られた作品がモデルの「似像」として語られているわけではない」とされるわけであるが、どうであろうか。モデルの模造品、つまり似像として語られていることはあまりにもはっきりしているのではないか(「似像」という用語は用いられていないにしても)。ちなみに389a6-b3は「何を見ながら慣習制定者は名前(ta onomata)を制定するのか(389a5-6)ということを類推するための事例として語られているのである。「作られた作品〔機織りの杼〕」



は '名前 (ta onomata) に当るものとして語られているわけである。そして389a6-b3の問いの答えとして『クラテュロス』 I が述べられているのである。

「括弧に入れた諸箇所は、本来は該当しないと思われる疑わしい使用例である」(『用語』115頁) というわけであるが、『クラテュロス』389A-B は本来該当する (Ⅲ) の使用例であるとわたしは考える。また『クラテュロス』 I, 及び『クラテュロス』 II も (Ⅲ) の例であるとわたしは考える。「パラダイグマ」という語は用いられていない。その点については、(Ⅲ) に関して、「「パラダイグマ」という語がアイデアそのものについて用いられる例は、『パルメニデス』、『ティマイオス』以外にはほとんどな」という観察をしておられる(『用語』114頁) ことが参考になるだろう。また「似像」を表わす語が用いられていないが、その点に関連しては、Ⅲでふれた)

次に、389B9-C1, E3-390A1, 390B1-2が (I) の例とされている点についてとりあげよう。

389b8-c1は「布地も薄手か、厚手か、リンネルか、ウールか、その他どんな種類にしる、それ用の桴を作らなくてはならないという場合、どの桴もみな桴の形をしていなくてはならない (dei to tēs kerkidos ekhein eidos) ことは言うまでもないが、各々の素材に極めてしっくりした、そういう形状を各々の桴に持たせなければならないのではないか。

389e3-390a1は「同じ形状を持たせる限り (tēn autēn idean apodidōi), 異なった鉄材の中であっても、それでも、その道具は真っ当なものなのだ。

390b1-2は「ところで、どんな木材でもよいのだが、それが桴として適切な形状のものか (to prosekon eidos kerkidos …keitai) 知ることになるのは誰か。

以上の三例、eidos, idea, eidos は製作者がモデルを見て制作する、または制作した作品についてのものである。ここは、ソクラテスが問いかける「Xとは何であるか」のXとその事例との関係が問題になっているような文脈ではない。モデルと明確に区別された内在的性格について ekhein, apodidōi, keitai は用いられていると考えられる。従って389B9-C1, E3-390A1, 390B1-2は (I) ではなく (I') とされることになるだろう。となると『用語』の調査に従って『クラテュロス』は中期以降の作品ということになるだろう。事実、先生も『著作集』V「プラトンの哲学」(1998) 202頁で、『クラテュロス』は「このグループ [中期対話篇] に属すると思われる」として、『用語』とは異なる見解をとっておられる。そして中期対話篇における「位置づけには今のところ確信がもてない」としておられる。

もし『クラテュロス』 I 及び『クラテュロス』 II と、『パイドン』 I, 『ポリテイア』 I, 『パルメニデス』 132a-b2などとの関係についてのわたしの以上の観察が誤っていないとすれば、『クラテュロス』は、中期対話篇の中では位置づけられず、後期対話篇の『パルメニデス』のあと、そして『テアイテス』の前に位置づけるのがもっとも自然だと思われる<sup>(3)</sup>。

- (3) 藤澤先生は『パルメニデス』の次の著作を『テアイテス』としておられる (例えば『著作集』V 291頁)。わたしは『テアイテス』に先だって、アイデアとその事例の間であって唯一、独特の位置を占めている「名前」、そして『パイドン』 I, 『ポリテイア』 I などにおいてしかるべく詮議だてのされていなかった「名前」の資格・身分が詮議されたのだ、と考える次第である。ちなみに、L.Brandwood, *The chronology of Plato's dialogues*, 1990, p.252は、『パイドン』、『国家』第一巻、『饗宴』、『クラテュロス』その他の中のものだが、より後期の著作に一番近いということになるかもしれない、としている。また G.R. Ledger, *Re-counting Plato*, 1989, p.224 は、『クラテュロス』、『国家』、『パルメニデス』、『テアイテス』の順を提示している。

## VIII

終わりに『クラテュロス』篇全体の構成を見ておこう。全体は383a-440eの58頁。本稿で取り扱ったのは、はじめの383a-390eの8頁。全体の14%弱。あとはクラテュロス説が提示され、検討されている。

クラテュロス説の内容は、第一に「名前で呼ばれる物事がどのようなものであるかを、当の名前がとてかく示していれば、そのことが名前の正しさであるというわけである」(onomatos, phamen, orthotēs estin hautē, hētis endeixetai hoion estin to pragma. 428e1-2) というものである。これだけではぼんやりしていてどういうことかはっきりしないが、その前の391a-428dの38頁分 [全体の65%強] はおおまかにいってクラテュロス説の説明だとすることができるだろう。その中から具体例を一つ示すと、alētheia《真理》はalē《放浪》とtheia《神的な》という元になる名前からできていると恣意的に分析され、そう呼ばれる物事がどのようなものであるかを示しているかといえ、(在るものの)「神的な放浪」であることを示しているとされている(421b3)。それならば、そのように元になる名前のまた元になる名前についてはどうかと問題にしていけば、最後にはいわば元素的な名前に行きつくことになるだろうというようなことが問題にされ、例えばtromos《震え》がそのような名前とされている(426d6-e3)。そしてこの名前の中の音rは、発音に際して最も多く振動して静止することが最も少ない。そこで運動を模写するには格好の道具とされる。つまり元素的な名前については、その音形を構成している音が、当の名前の対象がどのようなものであるかを示しているのだというわけである(cf.423e7-9, 426d2-6) [なお、t-, -omosが余計に付け加わっていてもなんら問題ではないとされるのである。cf.393d-e9]。以下便宜的に、alētheiaに関するような考え方を「教示説」(a)、tromosに関するような考え方を「教示説」(b)と略称する。「教示説」(a)も「教示説」(b)もでたらめなもので、すでにその説明の部分で、それぞれ、「今日のところはさておき、明日になったら、お払い箱にして、身を清めることにしよう」(cf.396e1-4)とか、「突飛で滑稽なものである」(426b6)というようなものとして扱われている。

ところでクラテュロス説は「教示説」(a)と「教示説」(b)だけではない。「ある限りの名前はすべて正しくつけられている、また誤りを語ることはまったく不可能である」(panta ara ta onomata orthōs keitai; hosa ge onomata estin. 429b10-11. pseudē legein to parapan ouk estin. 429d1) という主張もしているものなのである。即ち、例えばHermogenēsという名前は、ヘルメスの血統にふさわしい対象につけられている場合に正しく、ふさわしい対象をそう呼ぶ場合に正しく呼ぶことになる。そうでない場合は誤ってつけられているのでもなく、実はそもそもつけられていないのである。また呼んでも、誤って呼んでいるのではなく、単に空しく音を立てているにすぎないのである(429b1-e9)。この主張を「虚偽不可能説」と呼ぶことにする。

さらにまた「教示説」(a)と「教示説」(b)は、名前はその対象がどのようなものであるかを示しているという考えであるから、名前を知ることとはものごとを知ることだという考えに通じていることになる。しかもものごとを知る唯一最良の方法である(ou pany ti einai allon, touton de kai monon kai beltiston. 436a1-2) というのが、実はクラテュロスのまた主張するところなのである(「名前依存説」と呼ぶことにする)。しかして「名前依存説」によって、つまり名前によって知られるところでは、ものごとはすべて流れているというのがさらにまたクラテュロスの主張なのである(「ヘラクレイトス説」。作品の半分以上が「語源」に費やされているのは、これを具体的に例示するためであろう)

つまり391a-428dに続いて、429aから終わりの440eまではクラテュロス説には「教示説」(a)、「教示説」(b)に加えて「虚偽不可能説」,「名前依存説」,「ヘラクレイトス説」という側面があることが示され、この五つの側面がそれぞれ論駁され、疑問視されている(その詳細は拙稿『「名前の正しさ」に関するクラテュロス説』(平成4, 5年度科学研究費補助金一般研究(B)研究成果報告書,「古典期アテナイ文化の総合的把握—哲学と文学,及びその歴史的背景」47-60頁で取り扱った)。そして「ヘラクレイトス説」にしても、「虚偽不可能説」にしても、それほど深い内容のことが問題にされているとも思われない。要するに391a以下終わりまで、作品全体の85%近くは遊戯的な内容のものであると言ってよいと思う。

ところで、登場人物ヘルモゲネスの考えは、クラテュロス説がよく理解できないままに、反対したいという気持ちから述べられたものである。そしてクラテュロス説よりもソクラテス自身の考えの方がもっと聞きたいという要望にソクラテスがヘルモゲネスの考えを検討しながら答えるというように作品は構成されているとわたしは考える。このように見てくるとクラテュロス説はヘルモゲネスの疑問を引き出させ、それを扱いながらプラトンが自説を述べる上での「肴」という趣向なのだと思われる。しかも慣習的に与えられている名前は〈名前〉のアイデアの模造品であるという、この作品の一番の本音と解される部分があたかもクラテュロス説であるかのようにしらばくれて言われている。あらためて全体を見ると、挑発的で、実に巧妙に構成されている作品といえるのではないか。<sup>(4)</sup>

- (4) 次のような評価にわたしは賛成しない。“The *Cratylus* is not one of the best finished Platonic dialogues.” M.Schofield, “The dénouement of the *Cratylus*” in *Language and Logos*, ed. Schofield and Nussbaum, 1982, p.69.

またクラテュロス説のなかの「ヘラクレイトス説」は、385e4-386d1で取り上げられているプロタゴラス説とともに、『テアイテトス』第1部と、同じく「虚偽不可能説」は第2部とつながりがある。385b2-d1で取り上げられている全体と部分の真偽をめぐる議論(それに「教示説」(a)と「教示説」(b)も)は第3部の単純要素とその組み合わせとの可知不可知をめぐる議論と関わりがあろう。『クラテュロス』は、『テアイテトス』で扱われる問題を名前との関連で、多分に遊戯的に扱いながら、予め素描もしているということではないか。作品末尾のクラテュロスの言葉(kai sy peirō eti ennoein tauta ēdē「あなたのほうもそれ[ヘラクレイトス説]についてさらに考察を続けていってください、さっそくにもですな」440e6-7)も、両作品の近接を示しているかもしれない。

## 付記

本稿を成すにあたり、『クラテュロス』は『テアイテトス』に比較的近い時期の作品(田中美知太郎全集増補版第二十四巻『プラトンⅡ』四二九頁)とする判断に多く依存するところがあった。見当外れをしていないことを願っている。

藤澤令夫先生には、著作集(の特に第二巻第四章)を通して、また直接にも種々御教示いただいた。もはや直接に御論評いただくことができなくなってしまったのが残念である。

なお言うまでもないことであるが、拙論に見出されるかもしれない誤り、不足不明瞭はすべてわたし一人の責任である。

[Abstract]

## The *Cratylus* Reconsidered

Toshimitsu TANAKA

The *Cratylus*(389d4-8) says, "Then, my dear friend, must not the lawgiver also know how to embody in the sounds and syllables that name which is fitted by nature for each object? Must he not make and give all his names *with his eye fixed upon the absolute or ideal name*, if he is to be an authoritative giver of names? [italics mine.] This passage means, I take it, that every name given to us customarily is a copy of its ideal name(the Copy Name Argument). The *Phaedo*(102b1-3) says "that each of the abstract qualities exists and that other things which participate in these *get their names from them*" [italics mine.] In this passage, can I take it that names of particulars are the same as those of the Ideas in which they participate? It is not clear,I think,and I shall refer to this as the Same Name Argument. The Same Name Argument has a weak point.E.g.each of the following propositions states a fact different in status from each other: (cf. *Phaedo*, 100c4-6)

( i ) The Idea of Beauty is beautiful.

( ii ) This particular thing is beautiful.

Nevertheless,the Same Name Argument inadequately induces one to think the meanings of "beautiful" in the propositions ( i ) and ( ii ) are the same in status. The *Republic*(596a6-7) says that "we are in the habit, I take it,of positing a single idea or form in the case of the various multiplicities to which we give the same name" It is not clear if some multiplicity and its Idea have the same name.If the Same Name Argument holds true,we can posit another Idea according to this procedure.Strangely,in the same way, other Ideas will appear infinitely one after another. I take it that the main aim of the *Cratylus* is to drive away the above-mentioned unclarity and vagueness.It may be said in passing that the so-called Third Man Argument of the *Parmenides* (132a-b2) was presented to make one become aware that there is such vagueness in the *Republic* (596a6-7). I think that the *Cratylus* was composed after the *Parmenides* and before the *Theaetetus*.

---

Key words : Plato, *Cratylus*, name